

き
み
子

忘らるる身ならんと思ふ心こそ

忘れぬよりもおもひなりけれ

君 子

一

これは藝者町の或る家の入口の提灯に書いてある名である。

夜見ると、此町は世界中の尤も珍妙な町の一つである。船の甲板上の通路の様に狭く、そして何れもきちんと閉めた店先きの暗くびかびかする木造普請——何れも霜のかかつた玻璃の様に見える小さい紙障子が附いて居る——は一等船室を想起させる。實際は何の建物も二階三階であるのだが、それが直ぐには分からない——特に月がないと——といふのは、一番下の室だけに燈火が點いて居てそこは底透明かいが、それから上は眞暗であるからである。燈火といふのは、狭い障子の後の燈火と、外に釣つてある提灯である——此提灯は各戸に一個づつある。町を見渡すのは此等の提灯の二行に並んで居る間からで——遠くの方は二行が合して、一本の黄色な光の棒

になつて見える。提灯の或る者は卵形或る者は筒形で、中には四角又は六角のものもある。そして何れも日本文字が其上に美しく書いてある。町は非常に静かである——或る大きな展覽會の家具陳列室の閉鎖後といふ静かさである。これは住人の大部分が不在であるからである——何れも宴會や他の酒席に待して。彼等の生活は夜の生活である。

南に向つて左側にある最初の提灯に書いてある文字は『きんのやうちおかた』である。それは『おかたが住んで居る金の家』といふことを意味する。右側の提灯は西村といふ家で、みよつるといふ娘が居ることを告げて居る——みよつるといふ名は、立派に生活して居る鶴といふ意味である。左側の二軒目には梶田といふ家がある——そして其家には、花の蒼といふ意味の小花と、人形ひなの様に美しい顔の雛子が居る。其向ひは長江家で、其處には君香きみかと君子きみこが居る……そして此二行の明かるい名の行列は、半哩も長く續いて居る。

此最後の家の提灯の文字は、君香と君子の姉妹關係と——それからそれ以上の事實を示して居る、と云ふのは君子は二代目としてあるからである。二代目といふ語は翻譯すべからざる敬稱で、君子は君子第二號であるといふことを意味する。君香は君子の師匠で且つ主人である。彼女は二人の藝妓を養成したが、二人共君子といふ名であつた、或は寧ろ彼女が同じ名を二人に附けた。此同じ名を二度用ふるといふ事は、第一の君子——一代目——が有名であつたといふ事の證據である。不運な、或は不成功であつた藝者の藝名は、決して其後繼者に附けられない。

若し然るべき理由があつて其家へ入ると——すると其障子を開けて、訪問者のあることを告げ

る鈴の音を鳴らしながら——君香を見ることが出来よう——若し此小一座の藝人が其夜の招聘に出て居なかつたら。そして彼女は甚だ伶俐で語るに足る女であることを見出すであらう。彼女は氣が向けば最も興味ある話——肉も血もある話——人間性の眞實を語る話——を語つて聞かすであらう。といふのは藝者町には傳説が——悲劇的、喜劇的、或は準樂劇的な——澤山あり、そして何の家にも話が遺つて居て、君香はそれを皆知つて居るからである。或る話は非常に恐ろしく、或る話は人を笑はせ、又或る話は人を考へさせる。初代の君子の話は此最後の部に屬する。それは最も珍らしいものの一つではないが、西洋人にも了解するに尤も困難ならぬものの一つである。

一一

一代目君子はもうここに居ない。彼女はただ記憶に遺つて居るばかりである。君香が君子を職業上の妹とした時は、君香も極若かつた。

『ほんとにすばらしい娘です』とは君香が君子を評した詞である。藝者商賣で評判を取るには綺麗であるか、甚だ伶俐でなければならぬ。有名な藝者は普通兩者を兼ねて居る——極若い時に才色兼備の見込みを附けて、仕込役に依つて選ばれるのであるから。平凡級の唄女うたひめですら、年頃には相應の魅力を持つに相違ない——たとひ鬼註も十八といふ日本の俚諺を作らせた『惡魔の美』

なりとも。併し君子は綺麗以上であつた。彼女は日本人の美の理想に叶つて居た。そして其れは十萬人中の一人と雖も、容易に達せられぬ標準であつた。其上彼女は伶俐なばかりではない、萬藝に通じて居た。優雅な歌も詠むし、花も巧みに生ける、花の湯も申し分なく出来る、刺繡もする、押繪もする。一言で云ふと、彼女は淑女であつた。彼女が初めて突き出された時は、京都の花柳界は色めき立つた。彼女は思ふままの勝利を得べく、玉の輿が彼女の前にあることは明らかであつた。

註 此俚諺を精しく云ふと、鬼も十八、薊の花である。又龍に就ても同様の俚諺がある——龍じよも二十はちといふ。

併し問もなく、彼女は又其職業にも完全に訓練されて居る事が明らかになつた。彼女は殆ど何んな事態の下にも、善處する事を教へられて居た。といふのは、彼女に分からなかつた事は、君香が悉く精通して居たからである——美の強さと情の弱さ、約束の手管と無頓着の價値、其外男心のあらゆる愚痴と邪惡、こんな事は君香から教へられたので、君子は餘り失策もせず涙も流さなかつた。次第に彼女は君香の願ひ通りになつた——少し許り危険な者になつた。夜飛ぶ鳥に於ける燈火もさうである、さうでない鳥は衝き當たつてそれを消すであらう。燈火の義務は愉快なものを見える様にするにある、惡意はない。君子にも惡意はなかつた、そして餘り危険ではな

かつた。案じ顔の両親は彼女が堅氣の家に入らうともせず、又戀物語に身をやつさうともせぬ事を發見した。併し彼女は、血で誓書に署名したり、變はらぬ情のしるしに、左の小指の端を切れと女に迫つたりする様な若者には、特に情深くしなかつた。こんな男には、思ひ返させる様に皮肉な療治もしてやつた。彼女を身も心も獨占するといふ條件で、家屋敷を提供した二三の金持ち、一層すげない目を見せられた。或る一人は、君香に莫大な代償を提供して、無條件に彼女を受け出さうと鷹揚な態度に出た。君子は感謝した——併し藝者を止めなかつた。彼女は肱鐵砲を食はずにも、憎みを買はぬ様に巧妙にあしらつた、そして多くの場合、失望を癒やして遣る術を知つて居た。勿論除外例もあつた。君子を我がものとせぬ限り、生き甲斐なしと考へた或る老人は、或る夜彼女を宴席に招いて、一緒に酒を飲ませた。併し人の顔を讀むに馴れてる君香は、巧みに君子の杯へ茶を（全く同じ色の）入れ換へた、そして直覺的に君子の貴重な命を救つた——其夜十分後に此愚かしい老人の魂は、唯だ一人で、そして疑もなく大失望の状態で、冥途に急ぎつつあつたのである。……其夜以後、君香は野良猫が小猫の番をする様に君子を監視した。

此小猫は熱狂的な流行妓（はやりっこ）となつた——當時の名物の一となり、評判の種となつた。彼女の名を記憶する外國の皇子もあつた。其皇子からダイヤモンドを贈られたが、彼女は身にも著けなかつた。其外苟くも彼女の機嫌を取るの贅澤に堪へ得る者から、莫大の贈物を受けた。一日でも彼女の恩恵に浴するを得んとは、凡ての貴公子原の野心であつた。それにも拘らず、彼女は誰れにも我れこそはと思はせる様な事はせず、又末懸けての約束を結ぶことを拒んだ。その事を云ひ出る

者に對しては、彼女は自分の身分を辨わきまへて居る由を答へた。堅氣の女さへ彼女を惡るく云はなかつた——それは何處の家庭不和の話の中にも、彼女の名が出る事はなかつたからである。彼女は眞に自分の地位を守つたのであつた。歲月は益々彼女を美化する様に見えた。他の藝者にも評判になる者はある。併し誰れ一人彼女の壘を摩する者はなかつた。或る製造業者は彼女の寫眞を貼貼紙に使用する獨占權を得た、そして其貼紙で財産を作つた。

子 併し或る日君子の心も遂に軟化したと云ふ、驚くべき報道が擴がつた。彼女は實際君香に別かれを告げた、そして彼女に望み次第の美服を買ひ與へ得る或る人と共に去つた——其或る人は彼女に社會的地位を與へ、彼女の香ばしからぬ前身を、人の口の端に上せまいと切望する人であつた——又彼女の爲めには十度死んでもよいといふ位で、既に戀の爲めに半分死んで居る人であつた。君香の言に依ると、其莫迦者は君子故に自殺しかかつたので、君子も氣の毒に感じ、介抱して舊態に復せしめたのだといふ。太閤秀吉は天下に恐ろしいものが二つある——それは莫迦と暗夜とだと云つた。君香は常に莫迦者を恐れて居たのであるが、たうとう莫迦が君子を連れて往つて了つた。君香は又全く利己的でなくもない心配顔で、君子は最早戻つて來ぬだらうと云つた、それは七生迄もといふ相惚れであつたからである。

併し君香の言は全く當つては居なかつた。彼女は實際明敏であつたが、君子の魂の或る祕密な抽斗抽斗を見抜く事が出來なかつた。若し出來たなら彼女は驚きの叫びを擧げたであらう。

君子が他の藝者と異なる所は血統の高い事であつた。藝名を附ける前の本名はあいであつた。此名は或る漢字で書けば愛を意味する。同音の他の漢字で書けば哀を意味する。あいの歴史は愛と哀との歴史であつた。

集 彼女は可なりの教育を受けて居た。幼かつた時先づ或る老武士の私塾に遣られた。——そこで
八 は少女達は、高さ一尺の小机を前にして座布團の上に坐つた、そして教師は皆無給で教へた。教
小 師は一般官吏よりも高給を得る今日では、却つて昔程正直でもなく又愉快でもなくなつた。彼女
の學校の往復には、一人の下女が書物、硯箱、座布團及び小机を携へて送迎した。

其後、公立の小學校に通つた。其れは丁度最初の近代的教科書が発兌された時であつた——其中には名譽、義務、善行等に就ての英佛獨の物語の日本譯が含まれて居た。何れも選擇は妥當で、此世界には迎もない服装をした西洋人の、罪のない挿畫が入つて居た。其懐かしいしをらしい教科書は、今は既に稀覯書となつて、久しい以前から左程面白くも巧妙でもない、物々しい教科書が使用されて居る。あい子は物覚えが善かつた。一年に一度の試験の時には、或る大官が臨場して、生徒は皆自分の子でもある様な口調で話して聞かせ、賞與を與へる時には銘々の柔らかない頭髪を撫でて遣つた。其大官も今は退隱せる政治家で、疑もなくあい子を忘れて居るだらう——今

日の小學校では、誰れも少女等を撫でて遣つて賞與を與へる者はない。

其時あの廢藩置縣の改革が起こつて、高い階級に居た家族は、引き倒されて無位無祿となつた、そしてあい子は學校を去るやうになつた。色々の大悲劇が引き續き起こつて、遂に彼女には母と幼い妹のみが遺された。母とあい子とは、機織りの外何も出来なかつた。併し機織りだけでは生活の資に不足であつた。先づ家屋敷が——つぎに生活に必要な品物がつぎからつぎへと——家寶、裝飾品、高價な式服、定紋入りの漆器などが——二束三文で、人の不幸で富み、所謂『涙の金』で成り上がつた連中の手へ渡された。同族の武士の大部分は、皆同様な難儀をして居たので、生きて居る人からの助力は得られなかつた。併し賣る物が無くなつた時——あい子の教科書さへ賣り盡くした——助力は死人から求められた。

あい子の父を葬る時、或る大名から拜領の太刀を棺の中に納めたが、それは黄金作りであつたと云ふ事を想ひ出したので、墓を發いて精巧な細工の柩つふを平凡な安物と取り換へ、塗鞆の裝飾をも取り外づした。ただ中身だけは武士たる父に入用があるかも知れぬといふので其儘にした。あい子は古式に依つて埋葬する時、高級の武士の棺として用ゐられる赤土焼の大きな瓮の中に跪坐して居る父の顔を見た。彼の顔立は墓の中に年月を経て尚ほ崩れて居なかつた。そしてあい子が中身を戻した時凄しい顔でよしよしと點頭く様に見えた。

到頭あい子の母は病みついて機も織れなくなる、亡者の黄金も消費されて了つた。あい子は云つた——『お母さん外に最早方法もありません、私を藝者に賣つて下さい』母は泣いて返事をし

なかつた。あい子は泣かなかつた、併し一人で出て往つて了つた。

彼女は昔、父の家で人を饗應する時、酌に雇はれる藝者の中に、君香といふ一本立の藝者が、屢々彼女を可愛がつた事を想ひ出した。それで彼女は直に君香の家へ往つて云つた、『私を買つて下さい、お金が澤山入るのですから』君香は笑つて、いたはりながら食事を薦めつつ、彼女の話を聞いた——あい子は涙一滴こぼさずに思ひ切つて話した。君香は云つた『澤山なお金を上げる事は出来ません、私も少ししか持つて居ないのでありますから。併しこれなら出来ます——お母さんに仕送りをするといふ約束です。其方が貴女を大金で買ふより宜しいでせう——貴女のお母さんは大家の奥さんでしたから、大金を巧く扱ふことは御存じないでせう。ですから貴女が二十四迄、でなければいつでも私にお金を返せるまで、私の家に貴女が居るといふ證文を書いて、お母さんの印判を戴いてお出なさい。さうすると私が溜まつただけのお金をたまたま上げますから、貴女がそれをお母さんの處へ持つてつてお上げなさい』

かうしてあい子は藝者となつた。そして君香は彼女に『君子』を襲名させ、そして母と妹を養ふといふ約束を守つた。母は君子が有名にならぬ中に死んだ、妹は學校へ通はせられた。前に話した事は皆これから後の事であつた。

藝者の愛の爲めに死なうとした若者は、そんな事をするのは惜しむべき境遇に居た。彼は一人子息であつた。そして富もあり爵位もある彼の両親は、彼の爲めには如何なる犠牲をも拂はうと

して居たのである——藝者を嫁に取ることさへ。其上彼等は我が子の爲めに、彼女が同情を寄せたと云ふので、全く君子を嫌つては居なかつた。

君子は行く前に、其頃學校を卒業したばかりの妹梅子の結婚式に列した。梅子は温良で綺麗な娘であつた。其結婚は君子が取り持つたので、それには彼女が男に關する日頃の知識を利用した。彼女は醜男ぶとこで、正直で、舊式な商人——惡黨にはならうと思つてもなれぬ男——を選定したのであつた。梅子は姉の選定の賢明さを疑はなかつたが、果たして時が幸福な配合であることを證明した。

四

君子が連れて行かれたのは四月の節であつた。連れて行かれた先きは、豫め彼女の爲めに準備された家で、凡て浮世の不快な現實を忘れる様に出來て居た——高塀を廻らした、大きな植多込みのある庭の、靜寂の中に迷ひ込んだ一仙宮といふ觀があつた。君子は其處で、日頃の善行のお蔭で、蓬萊國に生まれ替はつた様な感を起したのであらう。併し春は過ぎて夏が來た——しかし君子は單に君子で居た。彼女は理由は謂はぬが婚禮の日を三度も延ばしたのであつた。

八月の節になつて、君子は眞面目まじめになつて、溫和に併し毅然として、結婚拒絶の理由を告げた、

——『今迄永らく申し上げ兼ねて居りましたが、愈々申し上げる時が参りました、私は生みの母の爲めと妹の爲めに、今迄地獄の住居を致して居りました。それは今過去の夢となりましたが、私の胸の火傷は治りません、それを治す力は此の世の中に御座いません。此様な者が名家に入る資格が御座いませうか——貴君の子を生んだり、貴君の家を立てる資格は全く御座いませぬ……どうぞも少し喋らせて下さいませ、悪い事に懸けては私の方が貴君よりずっと色々存じて居りますから……又貴君の奥様となつて、貴君の恥辱を曝したく御座いませぬ。私はただ貴君のお相手、遊び友達、一時のお客——それも頂戴物を致さう爲めでは御座いませぬ。私がお側に居られなくなる時——いえ、そんな時が乍度参ります——貴君はお目の覺める時が御座います。それは私を全くお忘れにもなりません、併し今の様では御座いますまい——今のは迷ひです。私の心からの詞をよくお心にお留め下さい。何誰か眞實によい奥様が出来て、貴君のお子様をお生みになるでせう。私は其お子様を拜見致しますせう、併し私は奥様にはなりません、又母たる喜びを知つてはなりません。私はただ貴君の迷ひです——幻です、夢です、貴君の浮世の旅路に、ちらと差した影で御座います。たとひ後にはも少し善いものになると致しても、貴君の奥様には決してなりません——此世でも彼世でも。も一度結婚せいと仰しやいませ——そしたら私はお暇を戴きます』

十月の節になつて、何等推測すべき理由もないのに、君子は姿を隠した——消え失せた——全

く何處にも居なくなつた。

五

彼女が何時、どうして、何處へ往つたか知る者はなかつた。近處の者も、彼女の通る姿を見た者はないといふ。初めは直ぐ歸つて来るだらうと思はれた。彼女のあらゆる美しい貴重な所持品——衣服、裝飾品、貰ひ物など、それだけで一財産であるのだが、そんなものは一つも持つて行かない。併し何の便りも何のしるしもなく數週間が過ぎた。何か不測ひょんな事でも、彼女の身の上みづか起こつたのではないかとも思はれた。それで方々の河を渡つたり、井戸を替へたりした。郵便や電報の問ひ合はせもした。信賴の出来る傳僕を搜索に走らせもした。懸賞も出した——特に君香は君子を愛して居たから、謝禮はなくとも喜んで手掛かりを尋ねたであらうが、それにも謝禮を提供して報告を依頼した。併し官權へは依頼しても無効であつたらう。逃亡者は惡るい事をしたでもなく法律を破つたでもない。老大な國家の警察機關は、一青年の氣紛れな戀愛沙汰で運轉せらるべきでない。數月は數年となつた。併し君香も、京都の妹も、さては此美しい藝者の讚美者數千人中に、一人も君子を再び見た者はなかつた。

併し君子が豫言した事は事實となつた——時はどんな涙をも乾かしどんな憧憬あこがれをも治す、いくら日本でも同一の失望の爲めに、二度と死なうとする者はない。君子の崇拜者は遂に思ひ返した。

美しい新妻が選定されて、一人の男子さへ生まれました。そして又數年を経過した、君子が忤て住んだ仙宮には幸福が漂うた。

或る朝其家へ、施物を求むる様な風で、一人の旅の尼が來た。子供は尼の讀經の聲を聞いて門口に奔り出た。間もなく女中が例の白米の施物を持つて出て來て見ると、尼は子供を撫でさすつて、何か囁いて居るのを見て驚いた。其時子供は女中に云つた、『僕が遣る』——すると尼は大きな編笠の陰の下から、『どうぞ此のお子供様の手から、お遣はし下さいませ』と乞うた。それで子供は米を尼が持つ鉢の内へ明けた。すると尼は小兒に一禮して、問うた——『もう一度、坊ちゃん、貴君のお父様へ申し上げる様に今お願いした文句を、仰しやつて下さいませんか』小兒は片言交りに云つた——『お父様此世で再びお目にかかれぬ者が、貴君のお子様を拜見したので喜ばしう存じますと申します』

尼は軽く笑つて再び彼を撫で、そして急いで往つて了つた。女中は愈々きよろきよろして居る中に、子供は父に尼僧の傳言を云ふべく走り込んだ。

併し此傳言を聞いた父の眼は霞んだ、そして子供を抱いて泣いた。門に來たのは誰れであつたといふことを彼は悟つた、そしてそれは彼のみが悟り得る事であつた——隠されて居た凡ての獻身的な意味も了解された。

彼は思ひに耽つた、併し誰れにも漏らさない。

彼と、彼が昔愛した女との距離は、今や太陽と太陽との距離よりも大であると思つた。

彼女はどんな遠い市まちの、どんな狭い、名もない通路とほりのうねりくねつた隅の、貧民中の貧民にのみ知られて居るとんな見すほらしい小さい庵室で、此世を行ひ濟まして居るのやら、尋ねても無益だと彼は思つた。恐らく彼女は其處に、無窮の光の差し来る前の、暗闇を待つて居るのであらう。其光に接する時こそ、大恩教主の慈顔は彼女を見て微笑するであらう——其時こそ佛陀の聲は、人間の戀人の唇より出るよりも、遙かに深い慈愛の調子でかういふであらう——『お、我が法の娘、汝は圓滿の道を行うた。汝は最高の眞理を信仰會得した——それ故我は來たつて汝を迎へ汝を拯ひ取る』

Kimiko. (Yokoro.)
(戸澤正保譯)